宮古の自然'95

川上　勲（宮古高等学校）

自然や科学に興味のある人は何気ない農家のおじさんの話しとか，漁師さんの話しには，興味をかき立てられるだろう。彼らは毎日の暮らしのなかで動植物を見るともなく見ている。彼らが話す動植物の生態や自然現象には新しい発見があり，科学的にもつじつまが合ったりして，おもしろい。彼らは得意になって話し，生き々と話す。本人も楽しいし，聞いている側も楽しい。しかし，私自身，興味のかたまりと思っている割には，もっと詳しく聞けば良かったとか，あの時のメモはどこにいったのかとか，メモしてなかったなあの反省，しきりである。

宮古島の自然に関することがらに興味をもち，その目で自然を見たり，文献を見ても宮古に当てはめて考えたり，自分なりに何らかの結論をだしたりしていると楽しいものである。宮古島の地形や地史，気候や植生，関連した人々の習慣や考え方，どれをとってもおもしろい。また，植物方言には純な植物学とは違った面がブレンドされていて，おもしろい。その中には植物の生態や形態だけでなく，地域の文化が見えてくる。

以上のことがらの中から幾つかについて日頃，見聞きしたことがらや自分の観察や調査でわかったことなど気ままに書いてみた。また，今後，同タイトルで書く機会があるものと思い後ろに書いた年を示し区別することにした。

・アディフ

アディフとは，平良市の西原（西辺（にしべ）ともいう。）の方言で「蛸（タコ）の家」のことである。タコは海底にできた適当な穴をすみかとしている。いわば，専用の家をもっている。それをアディフと呼んでいる。タコ壷を海底に沈めていて，タコが入った頃引き上げる漁の「タコ壷漁」もあるくらいだから，タコの習性なんだろう。西辺の青年達と酒を囲む機会が在ったときに聞いた話しがおもしろい。彼らは護岸工事の「基礎打ち」や「海底の土砂さらい」工事をしている。漁師さん達だから潜っての作業は得意であり，日当が良いからと話す。最近は海水中で固まるセメントが開発されていて技術的には陸の工事とそう変わらないと話している。彼らの昼下がり，ひょんな話から，あることで「今晩，バー（カウンター形式の酒場）を一軒貸し切りする。」ことを掛けようということになった。ある青年が，自分が”海に入って10分以内にタコを取ってくる”から，酢醤油を準備して待っていてほしいと言ったからである。居合わせたものにとって，ことは穏やかでない。海の漁は冷蔵庫から持って来るようなわけにはいかない。不漁，大漁は神のみが知っ

ているからだ。そのうえ，約束されたかのように10分以内でということになると冗談でしょう。ということになる。そこで，できる。できない。となって「バー一軒貸し切り」の話になるのである。この掛けは，どちらも勝算があると思っているからおもしろいというのだ。

そこで，どうなった。と結論を促すと，言い出した青年の勝ちとなったそうである。10分どころか潜ってすぐに銛（もり）の先に大きなタコが踊っていたというのだ。

ことはこうだ。タコ漁をする人は自分のアディフをいくつか持っている。そして，漁をして一定期間，間を置いてまた，同じアディフを回るというのだ。そしたら，空き家になったアディフに新しいタコが入っているというのである。そのとき，穴の深さ，形，大きさはいろいろだが，入るタコの方もいろいろだという。深くて大きい穴に小さいタコ，浅い穴に体の半分しか入れないもの，あるいは，適当なものなど，組み合わせは自由というわけである。しかし，たとえ素手でつかめる様でも，必ず銛（もり）で突くという。素手でつかむとこのアディフには次から他のタコが入らなくなるというのである。

その青年はすぐ近くにアディフを知っていた。この青年にもそのアディフにタコが入っているかどうか分からない。そろそろ，入ってる頃だと予想しているだけだ。入っていなければ青年の負けである。そこで，そのアディフに向かって泳いでいく，青年は水面からアディフを人目みたとたん「入っている。」ことを確信したというのだ。というのは，タコは怪しい気配を感じると石で入り口にふたをする習性がある。しかも，ふたをする時，石を裏返しにしてしまうのだ。隠れたつもりでも所詮「サル知恵」である。いや，ここでは，「タコ知恵」であると言っておこう。裏返しの石ころはまわりの石ころとは色が違っていてかえって目立つのである。居合わせた同村の青年達は傍観し，アディフを知らない街や農村の青年達がこぞって，おごる羽目になったことは言うまでもない。

ところで，今のような話は沖縄本島国頭村の安波にもあるという。そこでは，訪ねてきた客をもてなすとき，少し待っていてほしいと告げ，女が目の前の海でタコを取ってきてその場で料理して振る舞うというのだ。その家には姑から嫁だけにその「タコの家」の場所を教え受け継いでいくというのである。そこは，山村で10軒足らずの小さな集落であり，隣村まで歩いて数時間かかるところである。1965年から70年にかけて私も何回か行ったことがある。昔は恐らくここを訪ねるというのは一日かがりか泊まり込みであったろう。こうして，遠方からの親戚や友人をねぎらって普段は口にしない馳走でもてなす心遣いが見えてくる。沖縄の人々の”やさしさ”を改めて認識させてくれる話である。しかし，自然のものを冷蔵庫ならぬ，生きたまま保存してあるというのは心憎い。

アディフの話を聞いてから一年程した頃だろうか。テレビのニュースでフィリッピンで活動する日本赤軍のアジトのことをアディフと呼んでいることを知った。このニュースを

海のアディフの主はどう聞いているのだろうかと考えつつ，気が滅入ってしまった。

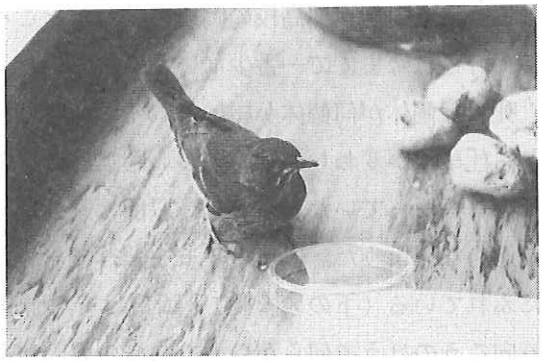
・シロハラ

シロハラはヒタキ科の小鳥で宮古の冬によく見られる。同科ではイソヒヨドリ，ムシクイの仲間，サンコウチョウ，ウグイス等が宮古では知られ，沖縄本島では天然記念物のホントウアカヒゲがいる。メジロはメジロ科で目のまわりが白く目立つので，これらとは区別ができる。近年，宮古ではシロハラの数が極端に減ってきて，例えば今冬は一羽も見てない。多い年には１０ｍも移動すれば別個体を見るか，聞くかするのに確かにおかしい。考えてみれば平成５年くらいから減っているような気がする。シロハラはウスリー川，アムール川，バイカル湖など旧ソ連の南側，国境付近から朝鮮半島にかけての広いところに棲み，繁殖している。日本へは冬鳥として越冬のため渡ってくる。冬の来訪者として，小さな宮古島にも毎年忘れずにかなりの個体数がきていた。観光客がこれくらい減ったら社会問題となって騒がれているところだが，シロハラについては日常生活には，どうてことはない。いや，シロハラが地上性でかなりの虫を補食しているので害虫防除の面で影響が出ているかも知れない。私にとって，シロハラの鳴き声や姿は冬の自然の一部となっているらしく，いなくなって見るとかなり気になる。最近，伊良部高校の岡氏に訪ねたところやはり，ここ２，３年減っていると言う。特に今冬は今までで一番少ないと話していた。例年だと，ガラス戸にぶっつかったなどと，死んだ個体が何個体か届けられるが今冬は一個体もないそうである。私自信は平成５年から仕事場が変わり通勤時の長い距離が無いに等しくなり，観察のチャンスが無くなったせいだと思っていた。しかし，以前は家の近くや郊外でもすぐ見られていたことを思うと間違いないようだ。以前のメモを調べても，たとえば，平成４年の11月18日のものにすでにふれている（下のメモ欄）。岡氏はその原因について，宮古の自然が失われたというより向こうのほうで何らかの大きな減少要因があるのではないかと話している。例えば，かってのツグミの密猟のような大規模ものなどと話す。しかし，今のところその原因は宮古では分からない。

シロハラは一般の人にも分かりやすい鳥だ。一般にフシャズ（平良，久松，上野，字伊良部，佐良浜），フチャズ（佐和田），フイズィ（鏡原），フシャイラ（城辺の皆福）等の方言名で知られている。飛ぶときに後ろばねの先っぽが白く見える特徴を持っているので，まだ知らない方は今後，尾ばねの先に注意してほしい。また，ピョンピョンとジャンプ（ホッピング）しながら見通しの良い空き地で人から一定の距離を保ちながら移動する。こんな習性も身近な小鳥として知られる一つになっている。大きさはスズメとヒヨドリ（ミパギビジュマの方言名がある）の中間程，これらに比べて胴体がふっくらと丸みをおびている。名の通り胸から腹にかけて白く目立つ。背，頭はくすんだ褐色，他の小鳥類よ

り目が大きく感じる。嘴は黒。喉には黒の縦じまの模様がある。これは平成元年の12月8日にガラスにぶつかって死んだ個体の特徴を図示したメモから取ったものである。シロハラはどの図鑑にも普通に載っているので，もし，必要ならその他の特徴はそこで調べてほしい。

シロハラの鳴き声は高い音と低い音の二種がある。鳥のなき声は言葉に表現すると人によってマチマチだからむつかしい。図鑑によると，「人が近づくと林内の地上からチャッチャッチャチャと鳴いて飛び立ち，近くの枝にちょっととまりシーとかツーとか鳴いて低く直線的に飛び去ることがよくあるが…」（高野，1981，野鳥識別ハンドブック，日本野鳥の会）や「人が近づくとチャッチャッチャッ，と飛び立つ。」（文献1－沖縄野鳥研究会偏，1986，沖縄県の野鳥，沖縄野鳥研究会）。「キョッキョキョキョやツイーと鳴く声はアカハラによく似ている。春，渡去前にポピリョン，ポピリョン等とさえずることがある。」（文献2－高野，1985，フィールドガイド日本の野鳥，日本野鳥の会）。などと書かれている。私のメモではチチッ，チチチーボロボロ，ボロボロギチギチチと書かれている。高い音はチャッチャッやチチッチチッと聞こえるが，低い音は私にはボロボロの表現で聞こえる。



ガラス戸にぶつかりしばらく飛べないシロハラ

シロハラはいつ頃，宮古に渡って来ているのでしょうか。サシバより前には見た記憶がなく，寒くなってからの記憶がはっきりしている。ニーミシ（沖縄方言で，その秋最初の北風のこと）が10月の10日前後に吹くからその後ならいるかも知れない。メモを見ると11月に入ってからが一番早い。しかし，気ままなメモだから当てにはならない。それに比べて去っていくのははっきりしている。3月の中旬から少なくなり，見える数が減ってくるのが分かる。4月6日の記録が最もおそい（下のメモ）。

ところで，冬の小鳥（シロハラかどうかは別として）は農家の男児の格好の遊び道具だ。小鳥を捕まえるカゴのことを佐和田ではストムと呼び，久松では単にトリカゴと呼んでい

る。ストムは25cm前後の立方体の形でつくる。縁だけを割りバシに少し太いくらいの棒や竹をしばり，漁網をかけてつくる。入り口は入りやすく大きく開け，中の「止まり木」はクルクル回転するようにつくる。入ってきて「止まり木」に止まったとたん，入り口の戸が上から落ちてきて閉じるような造りにするのである。その中の餌はまちまちで地域によって違う。例えば，岡氏はブッソウゲの木の中に仕掛，そのまま，ブッソウケの赤い花をちぎって使ったらしい。ブッソウゲの花は食べないが好奇心で入ってくるらしい。久松では炊いたサツマイモを親指の太さ位のやや丸い形で使っているし，佐良浜，鏡原ではオオムラサキシキブの紫の実を使っている。ヤブニッケイの実が12月頃熟れるがそれを使っているかどうか定かでない。ヤブニッケイのことを方言でフシャラギーとかフシャズギーと呼ぶところがある。シロハラがヤブニッケイの実を食べている。ということに由来する。しかし，実際には食べているかどうかは確かめられていない。

次に実際に捕っているのはシロハラかどうかという問題がある。久松の友人は捕っていたのははっきりとオオマシャ（メジロ）やウグイス，あるいはそれに似たもの（ムシクイ類？）といっている。岡氏もほとんどムシクイの仲間だと思うと話し，ムシクイの仲間は見分けるのがたいへんだが，鳴き声等から，２，３種は宮古で越冬していると話している。しかし，はっきりフシャズを捕っていたともある（メモ欄のH7.12.24）。たしかに，シロハラは開けた所で枯れ草をかき分けてエサを捕っている所をよくみる。しかし，鳴き声から判断して，低い林の中で地面に近い高さ（１m前後）で過ごす時間の方が長いように思う。食性も木ノ実や昆虫の両方だと記載がある。「ノイバラ，サルトリイバラ，ナナカマド，ノブドウなどのしょう果やクマヤナギ，エノキ，クロウメモドキの実を好み，……などの昆虫やクモ，ムカデ，ヤスデ，オビヤスデなども餌とする。」（清棲，昭和41，野鳥の事典，東京堂出版）。宮古にもこれらの実に相当するものはある。ストムにどちらが多く掛かっているか，今後調べてみる必要があるようだ。

最近，次のような質問事項でＺ氏（50代）に電話取材してみた。

１．とりかごにはどんなエサを使っていたか。

エサはオオムラサキシキブ，ゲッキツ，クロイゲの実を使っていた。フシャイラ（シロハラ）を捕る方法は二つある。ワナで捕る方法，とりかごで捕る方法である。ワナで捕るとほとんど首を縛られて死んでいたので，生きたまま捕るにはとりかごをつかった。ワナには馬のシッポで輪をつくりフシャイラがよく来る所を見つけて仕掛けた。

２．どんな鳥がとれたか。

フシャイラが多かった。ウグイス，メジロも捕れたがフシャイラ（シロハラ）が多かった。フシャイラはよく枯れ葉をかき回すのでその場所をさがししかけた。

３．一冬でどれくらいとっているか。

10〜20羽ぐらいかな。一週間ほど飼って焼いて食べた。あんまり長く飼うとやせてくるので。

4．食べる習慣は城辺全体にあるか。

あると思う。当時は終戦後でタンパク質が滅多に手に入らなかったので，大きさには関係なく鳥類は何でも焼いて食べた。ツバメ，セッカ，スズメ，ハト，ウズラ，カラスなど。特にウズラ，ハトはおいしかった。

似たような質問を久松のＹ氏（49才）にしてみた。多くとったのはメジロである。飼っていて死んだら又捕っていた。食べることはない。飼うときはブッソウゲの葉をまるめている虫をとってエサとした。捕獲のとき使ったとりかごをそのまま飼育用にも使った。

＊シロハラに関するメモ

年月はメモした時期，場所の指定のないのは伊良部高校かその周辺。

平成７年12月24日…フシャイラ（シロハラ）を鳥かごでとって焼いて食べた（皆福出身のＺ氏の話）。ムラサキシキブの実を使って取った（佐良浜）。

平成５年３月24日…シロハラ，１羽見た。３月中旬からごくまれにしか見られない。

平成４年２月11日…フチャズとはシロハラのこと（伊良部の佐和田）。フチャーズギー，ジッツギーはヤブニッケイのこと。ストム（鳥を捕まえるカゴ）のなかにヤブニッケイの実を入れる（佐和田）。

平成４年11月18日…シロハラ，今年は一羽も確認できていない。１週間まえから見えないことに気づいた。

平成４年11月19日…シロハラあいかわらず見えない。アカハラ，ガラス戸にぶっつかっている。

平成４年11月24日…今冬はじめてシロハラの鳴き声確認。

平成４年11月26日…午前11時20分，シロハラぶっつかって死んでいる。尾斑で確認。

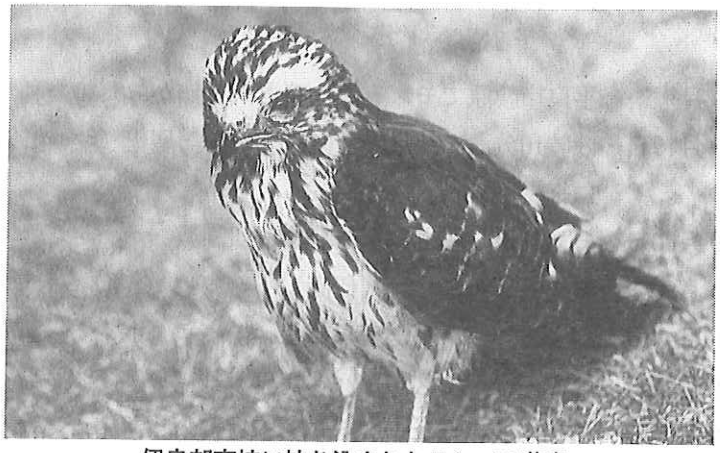
平成４年12月３日…シロハラ，８時20分，２の１の教室のガラスにぶっつかる。生きていたので，カゴにいれた後，１時半ごろ放鳥した。

平成３年４月２日…シロハラ見た。

平成３年４月６日…シロハラ，伊・高で見た。雄を

平成２年１月11日…シロハラのことをフィシャズという（伊良部，佐良浜）。生徒から聞いた。

平成２年１月18日…朝，ウグイス地泣き（平一校）。マクラム通り電力会社前　シロハラホッピッング。伊良部高校で午前中３〜４回見たり，聞いたり（鳴き声）した。



伊良部高校に持ち込まれたサシバの若鳥

平成２年３月27日…シロハラ，平良市の２カ所で朝みた。

平成２年３月28日…チチッ，シロハラ鳴き声一つ。

平成２年12月４日…今冬，初　５時頃　シロハラ（フシャズ）の鳴き声きいた。２回　同場所（伊・校校門正面），チチチー，ボロボロ

平成２年12月５日…朝，伊良部高校生物教室付近でシロハラ１回，職員室付近　１回　ボロボロチチチー聞いた。

久松，午後４～５時　シロハラ１個体見た。声は２回聞いた。ボロボロギチギチチ

平成２年12月13日…マシャは鳥一般をさす。カンマシャは「神の小鳥」の意味でスズメをさす（久松）。冬，トリカゴで取っていた鳥はウグイスやムシクイ類（久松）。

平成元年12月６日…シロハラ，上野村でフシャズという（上野村出身のM氏）。

平成元年12月８日…シロハラ，午後２時ごろ，授業中に鈍い音がしてガラスにぶっつかる。死亡。特徴の図示あり。

昭和62年11月１日…オオムラサキシキブ＝ンータギー（鏡原の方言），ンータギーをとってフイズィをとれ。ここでのフイズィはシロハラ。

・その他の鳥の渡り

シロハラ以外にもめずらしい鳥たちが宮古へ渡ってきている。よく観察している人にとってはそう珍しくないだろうが，個体数が少ないのは事実のようだ。

以下に，自分のメモを中心に簡単に述べてみた。

地名の記載のないのは伊良部高校かその周辺である。

１．モズ

平成８年１月29日…伊良部高校門前　シマアカモズ見た（伊・高の岡氏）。

平成７年９月……平良市腰原でモズみた。鳴き声は無かったので種類は不明。

平成４年９月19日…８時10分，モズ見た。図鑑で確認。眉斑（マユ），長い尾，全体的に細長。

平成４年９月30日…モズ見た。鳴き声もきいた（伊高）。

平成４年10月１日…モズ鳴き声きいた（伊高）。

平成４年10月２日…朝と昼，モズ鳴き声きいた（伊高）。「ギィ　〃　〃」

平成２年９月11日…朝と午後　モズ，ツバメ初見。

平成２年９月12日…モズ１羽みた。

モズ類はモズだけでここに来ているのもそれだけだと思っていたら，アカモズ，シマアカモズも渡ってきているらしい。幸い，鳴き声が特徴あって，少なくとも，平成４年のものはシマアカモズだと分かった。今後はやはり双眼鏡で確認する必要がある。それにしても，あの低くて大きいギィギィギィという声はどこから出るだろう。あの細身の体からは想像できない。それが，小さくても肉食鳥の貫禄かも知れない。

２．アカハラ

平成４年11月19日…シロハラあいかわらず見えない。アカハラがガラス戸にぶっつかっている。

生死は書いてないがぶっつかったらほとんど死んでいるし，手当をして逃がしたらその様子がメモされることが多いので死んでいたと思う。アカハラの記録は一件だけ。形や大きさはほとんどシロハラと同じだが，胸の赤みが目立つ。尾の先は白くない。アカハラは文献２の図によると日本に夏鳥として渡り，本州中部から北で繁殖する。越冬は阪神以南から沖縄，台湾，ホンコン，海南島，フィリッピンとなっている。宮古では稀なので渡りの途中で通り過ぎるだけかもしれない。

３．ホトトギス

平成４年５月25日…ホトトギス，ここ２，３日間，「トッキョキョカキョク」を２回伊良部高校周辺できいた。

平成４年５月27日…ホトトギスの鳴き声を午前に聞いた。昨日聞いた時間帯の授業では生徒に話をしたが聞こえなかった，選択生物で野外観察のとき，クマゼミがジーとにげた。今年の初記録

平成４年５月31日…クマゼミの初なき記録。

クマゼミが鳴き始めるころホトトギスが宮古に渡ってくることがわかる。ホトトギスは「トッキョキョカキョク」と鳴き声が聞こえ，「特許許可局」に当てはめられるので聞けば誰でもホトトギスが鳴いていることがわかる。結構，声も大きい。こんな楽しい自然は人々の生活に潤いを与え，ギスギスした人間社会にホット一息入れさせてくれる。私たちは都会では味わえない「自然の声」が身近に聞こえることを幸せに思わなければならない。「自然の声」は鳥の声だけでなく，波の音，風の音，こずえ（梢）の音などがある。ホトトギスは九州以北に夏鳥として渡来し，主にウグイスに托卵して繁殖する。越冬地はベトナムのメコン川あたり，フィリッピンでは周年生息している（文献２の図)。宮古で見られたのは北へ渡る途中のものか，春の渡りにしては遅いので宮古で繁殖しているものかもしれない。沖縄でも夏鳥として渡来し，森や林に生息するという（文献１)。もし，宮古で繁殖しているとすると托卵の相手はどの鳥か，との興味がある。ウグイスは渡りですでにいないし，繁殖している小鳥とすれば，セッカ，サンコウチョウ，メジロ，イソヒヨドリなどがあるがウグイスと同じヒタキ科に托卵するのかも知れない。いずれにしても片っ端から巣を覗かなければならないだろう。

４．エゾビタキ

平成元年９月27日…午前中　３校時　場所――伊良部高校

エゾビタキがクモの巣につかまり，逆さにぶらさがり，一方の羽だけ広げてバタついていた（生徒が発見)。地上５ｍ位上。竹ざおで取り，クモの巣を手でとって逃がした。10分位身づくろいをしていて飛んでいった。

エゾビタキ…１．顔にこれといった特徴がないこと。２．黒っぽいこと。３．腹は黒の混じったタテジマがあったこと。４．大きさが似ていること。など，図鑑上で見て決めた。

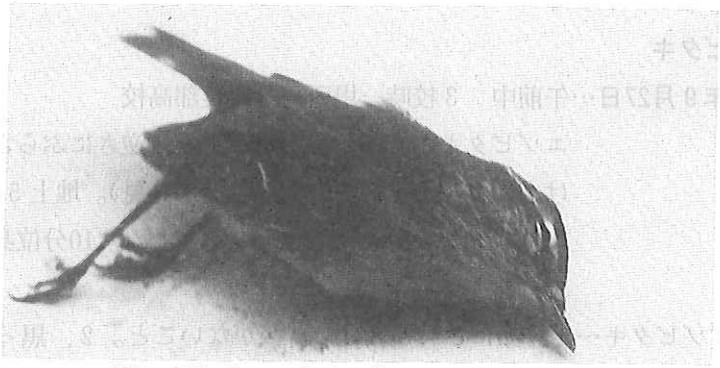
エゾビタキはカムチャカ半島，樺太，アムール川流域を中心とした広範囲に夏繁殖し生息している。越冬地はフィリッピン。旅鳥として日本全土を通り，琉球列島を通ってフィリッピンまで渡る（文献２の図)。ここまできてクモの巣に捕まるなんて，どこに災難が待ち受けているか分かりはしない。その後，無事にフィリッピンまで渡ったのだろうか。それにしても，ひとにぎりの大きさしかない小鳥のどこに樺太からフィリッピンまで旅する力がひそんでいるのだろうか。メモの鳥名に自信がないので岡氏に聞いてみたところ，やはり宮古でも見られるという。時期的にも合っているので間違いないだろう。と話していた。ムシクイの仲間は同大位だが「眉班が白い」特徴がある。これは「顔にこれといっ

た特徴がない」とメモ中にもあるのでやはりそれであろう。

5．ムシクイの仲間

平成２年10月２日…ムシクイの仲間，稔先生から受け取った。体長（口バシから尾先）11センチ弱。翼，尾，頭のてっぺんは黒灰色，腹は白，足は褐色，目の上に白い長い線，首部の背中側に少し濃緑色（ウグイス色）部がある（メモの図示からの記載）。

ムシクイの仲間は腹が白く，目の上に白い線（眉班）があることでエゾビタキと区別したがセンニュウの仲間もいるし，小鳥類の区別はなかなか手ごわい。わたしにはどっちの種類も自信がない。本気に勉強しないと最後まで無理だと思ってあきらめている。県内での確認種リスト（文献１）によるとキマユムシクイ，メボソムシクイ，イイジマムシクイ（昭和50年６月26日に天然記念物指定）が冬鳥，エゾムシクイ，センダイムシクイが迷鳥とあり，いずれも少ないとある。



ガラス戸にぶっつかり死亡したムシクイの仲間

6．カラスバト

平成４年９月１日…カラスバトガラスにぶっつかって死亡。大浦（３年生男生徒）が届ける。午前，午後の記録はなく時間は不明。次の日，台風15号襲来。

カラスバトはカラスのように全身真っ黒のハトである。しかし，カラスとは違って，くちばしや頭など，形，大きさはハトのものである。昭和46年５月19日付で国の天然記念物になっている。かって，現在の市営体育館前から東に坂を下る道路が直進して大野山林のリュウキュウマツ群落を破壊しアスファルト道が一周道路まで走る予定をしていた。それに反対したのが地元の自然団体であった。県は結局，環境アセスメント調査を実施，その結果迂回することが決まった。そのときの調査報告書のなかで「動物調査」側からは「国

の天然記念物のカラスバトの生息地」としての評価が大きく，その森林の価値はかけがえのない貴重なものであるとした。事実，宮高生の個体数調査の研究で明かであり，文化祭の科学研究部門で市長賞を取ったことがある。そのときの指導者の岡氏に，大野山林で最も多くみられるのはいつかと訪ねたところ冬場であると答えてくれた。留鳥として周年生息しているのだが夏場は繁殖地が散るため見る機会が少ないらしい。冬になると発達した森林の大野山林に集まるというわけである。ナワバリをつくるかどうか定かでないが夏の子育てのときのナワバリがとけ，集まってくるかも知れない。「宮古，八重山地方に生息するものは，亜種のヨナクニカラスバトで，特殊鳥類に指定されている。カラスバトとの野外識別はむつかしい。」（文献１）。

７．アカヒゲ

平成元年９月27日…１：30～３：00

アカヒゲと決定。父兄から電話あり１：15分ごろ，宮国宅２時頃学校に戻る。撮影し桟橋にいく途中に死んだ。３時頃シブキに乗せた。写真は２時15分ごろ。

特徴…目，くちばしのすぐ上（ひたいの一部），腹の半分（胸の部分）まで真っ黒または黒青色。腹は白，はね，背中は赤さび色または赤かっ色，足ゆび長い。

アカヒゲ（昭和45年１月23日に天然記念物指定）は背中が赤橙色のかわいい小鳥で野生の小鳥が地味な色が多い中ではよく目立つ，小鳥は保護色の上からも枯れ草や土の色系に体色を合わせた方が良い。とくに見通しのよい，広いところに身を置く種類は空の猛禽類の目をくらますために必要であろう。アカヒゲの鮮やかさは森林深く住み，めったに広いところに出てこないことを示しているかも知れない。それにしても，学生の頃，ヤンバルの与那覇岳や伊湯岳などの山奥で見かけたあのアカヒゲが伊良部で見られるとは驚きである。そのときは見慣れているはずなのに，始めはそれが何であるか検討がつかず岡氏に電話でアカヒゲの言葉を聞かされて，すべてがよみがえった。そうか，あの時のアカヒゲかと。20年も見てないとそういうものかとも思った。あのとき，宮国さんがいうには，夜，外から飛び込んできたということであった。あとは，岡氏に後の扱いを任すため定期船の「しぶき」に頼んで届けた。何でアカヒゲがこんな所にということでいろいろ聞いたり，調べたりしてみるとおおよそ次のことにまとめられた。

１．アカヒゲの仲間はアカヒゲと亜種のホントウアカヒゲ，ウスアカヒゲがある。アカヒゲはオスのわき腹が黒くなく，ホントウアカヒゲは黒い。ウスアカヒゲは別亜種で八

重山地方にすみ，全体に明るい色をし，アカヒゲに酷似する。

2．ホントウアカヒゲは沖縄本島と慶良間列島に生息する。アカヒゲは奄美諸島，種子島，屋久島，男女群島に分布する。

3．宮古のものはウスアカヒゲで渡りの途中のものらしい。秋と春に渡っているのは確かなようだ。秋はメモの例があるし，春は3月に野田山林で鳴き声が確認されている（岡氏）。しかし，北のどこに行って繁殖しているのか，越冬は八重山諸島止まりか，さらに，南へ渡っているのか定かでない。

4．今まで，宮古では，数年間で一桁ではあるが10個体近く確認されている。宮古はキチット調べられていない（岡氏）。

8．その他

その他，メモとして残ってないが，平成元年4月から平成4年3月の伊良部高校在任中に見られたものは次の鳥たちである。

1．キンバト2回，いずれも校庭の4m位のホルトノキの枝上。

2．チョウゲンボウ1回，生徒が生きたままとどけた。外傷もなく元気だったので撮影の後放した。

3．ズアカアオバト2回，校庭のホルトノキの枝上。

・鳥類のガラス戸衝突事故

今まで述べてきたことは，私が伊良部高校に在任中にとるともなく，メモしてきたものをなんとかまとめてみたいとの思いから書きだしたものである。まとめになってなく気ままな散文になってしまった。赴任当初，あまりにも鳥がガラス戸に衝突する事故の多さに度肝を抜かれた。多いときは立て続けに起こり，授業中でもドンとの鈍い音がして即死していたりしていた。また，出勤して廊下を歩いていると後ろで音がして振り返るとパタパタしていたりしていた。始めの1，2回は誰でも間違いはつきものと思い，さすが，”山学校だなあー”と思った（生徒達がそう呼んでいる。農地の広がる中にポツンと在ることを指して言うようだ。），2年目の終わり頃，その原因が分かってきたため，特に伊良部高校は多いのかも知れないと思うようになった。

その原因が分かったのは校庭の手入れをする用務員がかわったためである。始めの用務員はまったく木を切らず枝うち，潅木切りなど必要だがなあと，ここが思っていても一切しなかった。時折，私は自分で廊下にはみ出した枝等を切っていた。そして，鳥もよくぶつかっていた。そのうち用務員がかわった。新しい用務員は逆に，もういいのに思ってもどんどん木を切りすぎる。太い枝でも平気で切るし，潅木なら花木として並木になってい

ても残さない。後は切るものが無くなったのか，環境整備部長の教諭を通してあの木を切りたいといってきた。りっぱな大木故に本人もためらったのだろう。結局，校庭全体のこんもりとしたのが枝うちされスケスケになった。それは鳥の衝突事故を減らし，二つの理科室が明るくなることをもたらした。

では，なぜ鳥はガラスに衝突するのだろうか。結局，「ガラスに写った木のシルエット（影絵）を向こうに見える林と思い，そこに移動しようとして，飛ぶスピードのまま衝突するのである。」そのシルエットが「良くできている」ばいるほど多くの鳥がそれを疑わずにシルエットの林に向かっていくのである。伊良部高校の場合，次の条件がガラス中の林を「より良くできている」ものにしている。

1．廊下に沿って高さ４m～５mの樹木が等間隔に植えられている。
2．廊下に窓がなく，肩の高さ位のセメント壁が外との仕切になっている。そのため，約３m幅の廊下をはさんで，もう一つの壁が理科室のガラス戸でありミラーとなる。
3．ミラーには，仕切の外に連なる樹木が写り，遠くにある大きな森林を思わせる影絵（シルエット）ができあがる。試しに，鳥の高さで覗いてみたらカラーではないが，林冠だけがはっきりと写り大きな林が見えた。ちなみに，同じ棟の家庭科教室側は高いアカギがあり影絵ができないので衝突は一回もない。
4．しかも，廊下の天井が廊下の幅のひさしとなり，空からの邪魔な光が影絵に当たらず，さらに後方の教室の暗さが鏡の効果を引き立てるのである。
5．影絵の出来を左右するのは天気や時間も関係し，季節（太陽の高度）も関係する。ぶっつかるのは，良く晴れて，空が明るい日が多い。そして，朝が最も多い。だんだん太陽の位置が変わるので減っていく。午後はまれにしか衝突例はない。曇の日も衝突はへる。目のいい鳥類は影絵中の空の明るさなど，不自然な部分があるとすぐに見抜くのだろう。ですから，案外ちょとした工夫で防げるのではないかと考える。
6．原因がわかったならその気さえあれば，対策は簡単である。要するに，「架空の林をガラス戸に作らさないよう工夫すれば済む」ことなのだ。そのためには，建物の向きやヒサシの長さ，廊下のガラス戸と外の木の位置など，ちょっとした事を考えるだけで済む。もう，そろそろ，「人間側」からだけ検討していたものを「自然側」にも相談することを真面目に考えても良い頃だと思う。今後，集落を離れて造られる自然の家や公民館，その他の施設等に今の話を期待したい。

先ほどの話のなかで，言うまでもないことだが，「こんもり」でなくなった校庭の木がガラスにできた林を「少し出来の悪いもの」にしたために衝突事故が少なくなったのである。